大谷上人

顯現極樂

目次

前篇

恩師辨榮聖人の十週年を迎へて……一
念佛三昧仙……六
乘願力の喜と望……一一
任の爲めの忍土……一三
力の泉はいかにして得可きか……二〇
光明主義を信奉して……二六
人生と淨土 附道詠……二八
ミオヤの世界……三五
闇、月、日……三七
日本の使命……四〇
國法的に靈養期間を一切の人に與へよ……四二
因緣の電線架設と六通無礙の靈電局……四四
同胞樂……四六

後篇

宗祖と光明主義……五一
極樂は無爲泥洹の道に次げり……五六
往還二相、靈肉一致第三帝國……五七
食時の感話……六二

人生と淨土……六六
寺院に對する所感……六七
往　生……六八
刑に服せる人へ……七一
心……七二
病中說法隨聞記……靜　道　七四
法門圖表……九〇

道詠

病中述懷（短　歌）……九一
光のうた（短　歌）……一〇〇
六字歌（長　歌）……一一六
作りかへおじひの歌（長　歌）……一二〇
起行日課（長　歌）……一二一
さめたる子の歌（長　歌）……一二三
光明名號攝化十方（長　歌）……一二六
人間禮拜（短　歌）……一三一
極樂、等、（短　歌）……一三二
我子の尊さ（長　歌）……一三四
時の尊さ（長　歌）……一三六

（一）恩師辨榮聖人の十周忌を迎へて

「念がねば今に日が昏れますぞ」とは常に吾等に警告し給ふた御言葉である、「日昏れる」とは蓋し二義あるものと思はる、一には吾等の命の永からぬ事を意味し、一には聖人が肉身を通して靈光を輝かし以て吾等を照導し給ふ事の久しからざるを意味するものと察し奉る然るに聖人御在世の折屢々其の警告を耳にしながらうつかりと日を送り年を重ね早聖人去りまして十周年我身又衰へて日昏とはなりぬ、惟て聖人の仙界へ與へ給ひし御文に「舊のふるき肉のとしはいくら重ねても〳〵も只煩惱の垢が增ばかりにて、新しく光明のなかの功德をつもるべき、もし外からは毎日々々太陽の光に照らされ中は――の光明に照らされ居る事を思へば空しく唯肉の年ばかりを數へて居ることも……」とある。聖人九州傳道の折柄筑前甘木町法泉寺にて布袋の眠れる側に童兒が帽子を捕つて杖の先に掲げて笑へる樣の面白き一幅の畫圖に或人讃を求めけるに聖人早速と筆取りまして

日は出でゝ三竿の空に昇りにき
世の人いかに夢や見るらむ

と書き與へらる、聖人のやるせなき御心の程拜察せらる、今は十九年の昔聖人筑紫筆導寺へ百數十日錫を止めて因緣の人を化度せんとひたすら其の人を求められしも殆ど耳傾くる者もなきまゝ一日久留米市に出で高山彥九郎の墓を訪ひ給ひ地下の彥九郎に語り給ふやう貴殿勤王の志を抱いて君國の爲め東奔西走せられし時耳傾くる者もなかりしと聞く今辨榮遠く九州に彌陀の聖旨に使ひせるも志を語るべき者もなし地上に眠れる者よりも地下に覺めたる勤王の士我が志をお聞き下されとて彥九郎と物語られたと云ふ事を聖人より

直々承はり恐懼に堪へざる次第である、斯くて聖人の傳道は大正三年頃より漸く眞實義に耳を傾くる者あるに至つたが其前は多く米粒佛燈等を求むる單に結緣に止まる者であつた、而して大正五年以後に於ける傳道は正しく光明主義の宣揚にて聖人の御身は實に忙はしく脇にこれから大宣傳だと思ひし所……念がねば日が昏れる——大正九年十二月四日越後柏崎極樂寺に於て御遷化遊ばされた、——嗚呼——

聖人の肉身を通しての照導は今は得られぬ悲しさなれども今既に三身一如の法の身と成らせ給へる聖人は眞應身として居まさぬ所もなく今現にこゝに在まして因緣の衆生を擁護し指導し給ふ事は滅後の法益頓に愈々盛となれる事實に依つて登信すべきである。

茲に仙界自を顧みるに何の幸ひぞや大正二年以來聖人格別の恩寵を以て育みを垂れ給ひき、されど驕慢と怠惰と懈怠の曲者たる仙界は上仙ならで下界六道の里にさすらひ輪廻の業を重ねゝてあさましくも所くて空しく一期の生を終らむとするを大悲慈念の鞭を擧げて我の眠りを覺まし給はんとの御慈悲にや昭和二年胃癌の大患に一大手術を加へて危ふくも一命は救はれたるも其後の覺醒精進ならざるをいかばかりかもの悲しく御思召けん更に本年五月病再發脊背又發背

今庭の紅葉ながめてあからむは
只恥かしき己が顏かな

されども捨てぬ大悲の御手墮ちんとすれど墮さじと抱きしめられ慈悲の床今は右脇の外は臥し難く頭北面西之も又離さぬ親の慈悲故に身動きだにもまゝならぬ骨皮筋の姿とはなりはしつれど有り難や

病こそなかゝ親の慈悲なれや

心靜かに法を味ふ

今は我身の日昏とぞなりはしつれど日昏なきミオヤの許に我が靈を抱かれ住めるうれしさは皆是恩師聖人の御蔭とぞ感謝し奉る

肉の身は皆早や落ちて南無しける
ミオヤのもとに歸るうれしさ

日昏なきミオヤの照らす日の本に
いつも生々我靈あるかな

尊しな三輪四の法の師は三身一如の身となりていつも居まして導きの眞應身は何處にも因緣衆生につけつもつれつ擁護指導を垂れまして必ず救ひ給ふ事何の疑ひかあらむ

生れては先づ思ひ出ん古里に
契りし友のふかき誠を

この宗祖の道詠有り難く／＼身にしみてこそ覺ゆれ輪廻の古里に在る我は無爲本國の古里に在ます恩師聖人の嘗て深き契を結びてぞ誓ひにかけて御救ひ下さる事を今思ひ出でゝ只々感謝慚愧の涙あるのみ。

十劫の昔の佛の御恩こそ
十年昔の法の師の恩

(二) 念佛三味仙

南無阿彌陀佛阿彌陀佛　見れば無常の姿には
念佛念法念僧の　心發せと法の音

聞いて心に響きなば　聲なき聲に打つれて
念佛の聲も出るものよ　聲が出ぬとはそりや油斷
生きた三味仙見ぬとても　よく〳〵聞いてくださんせ
三味は見るより聞くものよ　仙界三味の鳴る音をば
聞いてたもいな今は早や　骨皮筋の身となれど
親のなさけの撥當り　鳴る音は清く南無阿彌陀
南無阿彌陀佛と鳴り出して　終局に佛となりもすれ
あゝなうれしや有り難や　靈の頭かたむけて
秋のみのりの稻穗かな
ミオヤの前に感謝する　いつ〳〵迄も死なぬ身と
賀る靈の喜は　此土の御恩佛の恩
御恩〳〵の賜よ　いで此の上は何としやう
皮は割かれて骨は折れ　たとへ鳴振惡くとも
ミオヤのみ前に懺悔して　勇む靈の喜に
息の音糸の切るゝまで　皆のおかげで聖名稱へ
稱へる聖名は皆ともに　南無阿彌陀佛と鳴り通し
三味の使命を果さなむ　南無阿彌陀佛阿彌陀佛
いろは句へど散りぬるを　我世誰ぞ常ならむ
誰も一度は三味となる　骨皮筋のあはれさよ
ならぬうちにぞ早よなれよ　佛恩喜ぶ心には

佛恩報ずる身と成りて　終局に等しき佛とぞ
共に成りたい〳〵と　そればつかりが願にて
三筋合はせて南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛と鳴る三味の
願はミオヤに響くとも　聞いて歌はぬ人あれば
それは啞かよ聾かよ　人と生れしかいしよには
南無阿彌陀佛と歌はんせ　歌ふばかりが樂ぢやない
歌が出たなりや舞はしやんせ　きり〳〵廻ふてきりまふて
立ち働くは報恩行　それが此世のつとめにて
それが顯現極樂の　舞と樂しくなつてこそ
それで眞の人となる　眞の人ぞ菩薩なり
極樂舞に顯現の　聖國よろこぶ同胞と
共に携へ進みては　あの古里の親の許
無爲の都の御殿にて　親の御位跡を即ぎ
佛々平等一體の　三身圓の法の身は
彼の本國に在りながら　宿願因緣まち〳〵に
それ〴〵諸佛の化用をば　十方世界に現はして
還たも顯現極樂の　舞のつとめに出で來り
常恒不斷に報じなむ　唯一獨尊の佛の恩
南無阿彌陀佛阿彌陀佛　南無阿彌陀佛阿彌陀佛。
圖三味も出た歌も出た〳〵歌はんせ　南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

(三) 乘願力の喜と望

三身一如の大ミオヤ、招喚ます聖旨聞きしより、極悪最下の我機には、仰いで本願直信し伏して此身を觀ずれば、大悲の願船正に是れ、人身なりと覺らるれ、流轉生死の身なれども、菩提の航路一すぢに、思ひ定めて聖名稱へ心靈托す順風は、願力自然の運びにて、靈化聖育船進み、心靈更生なす時は、必ず彼岸に到らなむ。

御子と覺めたる人の身は、生死の海ぞ願海の、聖旨現はす務めあり、乘彼願力輕安の、蹶く靈の喜びに、勇みて任務を盡すこそ、淨佛國土の勇士にて、同性一如の同胞は、敬愛協力共働し、成就衆生の望みもて、ミオヤに仕ふ心より、長時無間に勵みては、攝生するも恭敬修よ、產業勤勉供養の本、讀觀禮稱讚歎の、心靈養ふ大事さへ、各々種々に務めてぞ、國際圓滿國發展、社會平和に家齊ひ、我身も立つて船進む、進むと云へど本よりも、生死に卽せる涅槃界、行くにはあらで光榮を、現す子等に顯來す、いでやつとめん何事も菩提に向ふ念佛の、心を本と爲す業は、萬行念佛に出で攝め、ミオヤの萬德顯はれて、自づと其身を莊嚴し、功德に充てる人々の、集ひの世界は極樂の、事々物々と蹶きて、聖國は此土に來るなり。

因緣種々に與へらる、使命は獨尊任務にて、靈すは顯現極樂の、佛法歸依の衆中尊、聖旨現はす菩薩なり、ミオヤの力を力とし、生きて働くうれしさは、日々の糧にも感謝して、益々活動祈るなり。

されど人身活動の、舞臺は一體二面にて、涅槃に卽せる生死海、四苦や八苦の波の上、業風時々に襲ひ來て、船も寶も奪はむと、狂ひ荒るゝに身も靈も、危ぶけれども南無阿彌陀

佛、大我の中の我なれば、大悲の力强くして、歸命勸請發願の、至心は無我の精進に、心は安く命を立て、感謝懺悔回向して、聖龍を頂つ報恩行、生々世々にと誓ひつゝ、無對光佛望みては、永恒の慈光に照らされて、共に進まん無量壽の國。

(四) 任の爲めの忍土

極樂へつとめて早くいで立たば
　身の終りには參りつきなむ

こは元祖法然聖人の道詠であるが、其の意義を味ふ事に於ては存外甲乙まち〳〵なるものあり其のいづれが眞に祖意に徹せるならむ

○ 極樂は向ふとばかり思ふなよ
　命つとむる任國も亦

○ 極樂を現はさんとの命をば
　かしこみ務め參る極樂

○ 任國の命も知らず果さずに
　うかく〳〵暮す人ぞ獄道

○ 極樂へ往くとは娑婆を極樂化
　すべき使命を帶びて任地へ

○ 任の爲め忍びこらへて極樂と
　世を體現して歸る本國

○ 本國は平等無爲の里なれど

九品は任土の務め振より

辨榮聖人の給はく

「極樂へつとめて早くいで立つ」とは正定聚の信仰確立したるなり、それより信後臨終まで光明中進行の程度九品或は九々乃至無量品と云ふを得べし、「つとめて」とは信仰成立で如來の御子卽ち念佛の人と成つたそれが因で心に味ふは果である、故に現在の生活中にも人々の心に入つて見れば千差萬別の階級がある。

光明名號の眞理を聞き如來は全く私の靈の御親であると確と自覺した時恰も靈の子が生れたので眞から稱名の聲が發する樣に爲つたのが心靈の產聲である。

第十八願に依て信仰が成立し、第十九願は信仰成立以後臨終の夕迄の體現を示したるもの「身の終りには參りつきなん」とは九品の來迎で卽ち現在の程度だけ九品の內いづれにか參りつくであらふ。

安心決定の一念、卽ち彌陀の我となつた時、自分には知ると否とを問はず、之を下品下生の往生とも又業非成辨とも見るべきである、業非成辨を若し發得して淨土を見る事だとせばむつかしきも論註では極樂に行くだけの資格の出來たのを業非成辨とせり。

極樂へ行くは願作佛心、度衆生の願力を得んが爲め若し之れなくば聲聞も緣覺も佛も異りはない、所詮は任地に趣く實力を得て任の爲め極樂活動が大事である。

辨榮聖人明治十六年廿四歲の時筑波山に至心念佛し三昧發得成就遊され、

彌陀身心遍法界衆生念佛々還念
一心專念能所亡果滿覺王獨了々

の境地を得られたそこが、既に成佛と云はるべきでありますかとの或人の問ひけるに對

しいまだし、天台の六卽を以て云へばまだ觀行卽とも云ふべき所だと答へられしと。下山後一切經を披見遊ばされ專ら度衆生の願力を養はれ尙其後大聖釋尊の立像を心想の大空に拜し給ひ正しく釋尊の聖意を御繼ぎ遊ばされ遂には明治二十七年印度佛跡參拜遊ばされた、そは思ふに卽位の式典に臨まれたものではあるまいか、然らば聖人の成佛を釋尊と感應面見の時と云ふも可ならむ、然し聖人余に語られしには地球上に於ては佛は釋迦一佛とするがよい、他の聖者達は十三日十四日の月と見るべきであると。

大正九年十二月聖人御臨終の砌弟子仙界御枕邊に侍す同月三日夜御危篤既に御往生と見る事三回その第二回目の時であつたと思ふ、何か御文を二回繰返し御唱へなされたやうだが唯僅かに因緣果滿とのたまひしかの如く一句耳に止まれども前後明瞭に聞き得難く誠に殘念至極と思ひしも余の直感的には

敬禮天人大覺尊　恒沙禪智皆圓滿
因圓果滿成正覺　壽住凝然無去來

の文と思ひ取りそれと同時に今や正しく聖人は大般涅槃に入り給ひ正しく釋尊の御跡をつがせられ眞應身として吾等を化度し給ふ事と信じた、「身の終りにぞ參りつきなむ」の一句を體現し以て我等に範を示し給ふた、聖人にして尙ほ大般涅槃の成佛の境地は身の終りである吾等只々臨終の夕までつとめ〳〵て聖旨のまゝに献げ行くべきである。

聖人の御臨終に在つた或る方は聖人が「今にして眞に時間の尊い事が知られた」と仰せられしを聞き、或方は又「此の三日間（十一月廿四日、五日、六日）に百年に勝る說法を聞いた」とのたまひしを聞く、願はくば身の終が攝化せられし終局とならまほしけれ。

されば聖人の御一生は大般涅槃に到るの努力精進であつた、但しそれは彌陀誓願の聖旨の

まゝに献げられたる無我の精進であり如來力の御顯れであつた、

○ 安心と腰をおろせば死の關所
　歩み通ふしぞ生き通しなり。

○ 御擁護の力に共に御の御跡
　精げみ進まば大菩提かな。

○ 逢ひたやと思ふ佛は會ひ難く
　いつも顧れぬ佛にぞ會ふ

○ もとよりも一所に居たる御佛に
　會ふてこそ知れ逢はぬ佛を。

○ 導きの佛なかゝ顔見せず
　されども捨つな捨てぬ親樣。

○ 念佛の前に在ます御佛は
　唯確信で慕へ導く。

○ 導きの慈悲のミオヤの在ますは
　宇宙中心念佛するとこ。

○ 念佛の聲が其のまゝ導きの
　慈悲のミオヤの御聲御姿。

(五) 力の泉はいかにして得べきか

現代種々と修養の途が講じられてをるが此の力の源泉を何處に求めて居るかの相違に依つて力の現れ方に於て大に段階相違を生ずる事となる、實に力の源泉を得る事は修養の根本

問題として要中の要である、宗教的意義ある人生々活には普通三要素あれば成立するが如し心靈の自覺（喚起）使命精進（體現）人生の歸趣（終局目的…菩提涅槃）の三である、然るに親の子なる事は自覺出來てゐても正しく親と相通じ相親む仲とならねば自覺も力弱きものである、自覺を力づけ體現を力づけて不斷の精進となり終局目的へ一路歸趣せしむるにはそこに力の泉を求めて之と連絡して斷へざる力我に流れ來たるを要す、此の點に就て光明主義は最も懇切を極めてをる事が特長中の特長とも云ふべく又是れ實に如來無究の恩寵を現はすものである、蓋しそは光明獨得に依る心靈更生（開發）の實感に依つて正しく活きた心靈となる事である、飯を食はねば働けぬが然し人は飯だけでは眞の働きは出來ない、そこには一面心の糧を要する、心の糧としては世間種々なる糧を求むれども所詮は大靈無限の靈の糧に養はれされば精進不斷の力の養ひとしては不足である、無盡の靈力も先づ靈に活きてこそ靈の糧として日々絶へず之を受けて靈の血肉と成り活動の源動力となる、されば先づ靈に活くるの途を急がねばならぬ、大靈に在ます如來は無限靈電の發電所にして我は一受働電機に過ぎぬが一度親子正しく相通じ相連絡する事を得ば無限の靈電我に流れ來たりてそこに斷へざる養ひの途は開かる、世の多くの修養は獨樂の外より力づけられたる如く久しからずして力盡きてたほれる又內に養ふ倫理修養は說かれても無限との連絡を缺けるは之又力弱く、或は無限との連絡を說るも冷やかなる理性的のものも力充分ならず所詮力は情熱が意志を通じて肉に現はれ來たる所に最も強し、今光明獨得とは如來無限の溫き親心は吾に徹し我が子心は親に通じこゝに親子親しく溫かき靈室に共にあるを得て如來無限の大慈悲は我を助けて力あらしめ如來の力を力として體現へと精進せしむ、妻を失ひたる人、夫を失ひたる人が心に養ふ力なき時は實に淋しき暮に墮入るに反し

靈に無限の愛の養を受けつゝある者は八風吹けども動ぜず天邊の月、己が進むべきに進み爲すべきを爲して止まざるは正に之れ力の泉に連絡あればなり、實に力の泉は、靈的逢阪の關を越ゆる所にあるなり、之れ靈的自覺（喚起）と使命精進（體現）の中間に光明獲得（心靈開發）の關ある所以にして之を越ゆる所に無稱光の味ひ心靈を養ひ斯へざる力は我に來り如來不斷の力は又我が力と流れ來りて活動す、然らば如何にして此の關所を越ゆべきか第十八願生因の願ひは正に此の關を越へて靈に生くるの恩寵聖旨を示めされたものである至心念佛の一行を以て親子相引く自然の情熱は靈電光を發し始めて生々たる心靈となる然して後第十九願の精進不斷の勇士となり一期臨終の夕まで如來の使命を體現率行して命の務め終る時如來の力よりよきやうに來迎あるにまかせ行くべきである、力の泉を完全に我がものとする事は彼の國に到り已つて六神通を得る事でそれは無餘涅槃に入つて得る而して其後の體現は十方界に入つて苦の衆生を救攝する常恒度生の働きである、然るに力の泉との連絡を得る事は如來と我靈と親近增上の三緣の神秘的實感を確實に得る所に正しく絶へざる連絡の道が通じて大靈の養に我靈は發はる此の實感を得て活靈となる事が開發を要とする所以である、心靈開發の實感には有餘涅槃の喜を感じ其の喜が働きとなりて極樂行の體現とはなる。

さて至心念佛とは法然聖人の所謂「愚鈍の身になして只一向に念佛すべし」との給ひし愚鈍念佛にして愚鈍とは一心不亂の狀態己を彌陀に投じ聲に心も打乘りて今現在前の如來の力へと確信の的に憶ひをかけて自己を投ずるなり、

阿彌陀佛と心は西へ空蟬の
もぬけはてたる聲ぞ涼しき

との道詠は正しく其の間の消息を示されたるものと思ふ、尙ほ法然聖人が如何に逢阪の關に心を盡されしかは其の道詠に

我は只佛にいつか葵草
心のつまにかけぬ日ぞなき

との給ひしを以ても知る事が出來る。

心のつまにかけるとは愛慕憶念である、「憶念の心常に」之れ實に肝要の要である、稱名すとも憶念の心なき時は冷かな鐘の聲と異りはない、稱名に依つて憶念の情熱益々あつく成り行きてこそ、そこに如來の慈悲も愈々強く感じられ暖められて遂に心靈の卵穀は破れて活ける心靈とはなり親子親しむ仲となる事は卵穀より出でし雛鳥の親を呼び親は子を喚ぶ有樣にも譬ふべく此に無限の親の御力は正しく我の活き働く源動力と成り聖旨を己が意とし三業四威儀につとむる體現精進となる。されば光明獲得心靈更生は辨榮聖人の最も懇々と力說勸唱せられた所以である、

○ 阿彌陀佛の力ほしやと急ぐ人
至心念佛三昧に入れ。（別時）愚鈍の身となりて唯一向に念佛すべし

○ 只申せ申す內には自ら
深き心も發りこそすれ。（平生）南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず

深き心とは如來と割なき仲となることで自然と神秘の靈感を得活靈となるこれが光通の人の進み方である。

（六）光明主義を信奉して

一切衆生皆悉く三身即一の如來の子なる事を信ずると共に人類は悉く是れ同胞なりと觀愛す、如來は今現に吾等を生き働き在らしめ給ひ而も前前西方には慈悲の靈容嚴然として十方を照らし念佛の行人を攝化し給ふ。

吾等今如來の中に在りて而も如來の功德尊容を敬慕し、憶念常に時々策勵、稱名忘らず、靈化聖育を仰ひで光明を獲得し、心靈更生以て人身是聖靈の活動體として如來の大願力に乘じて聖意のまゝに活動し常に眞人佛子の光榮を現はすを人生の本義とし現在を通じて永遠の理想としては一切の同胞と共に等く菩提涅槃を成ぜん事を所願とす。

左れば人生の舞臺に在りては眞現極樂の聖意を奉じて献身精進の外なく、命せの任期終らば理想の本國たるミオヤの許に歸り去つて又直に十方界に還り入て永遠の理想に向つて一切と共に向上の一路を辿り往きつ還りつ常恒不斷無量壽の中に只精進の極樂あるのみ。

○　靈に活き肉に働く樂こそは
　　これ極樂の樂と悅ぶ。
○　極樂の樂は働く樂にして
　　聖意のまゝに舞ぞ働く。

(七) 人生と淨土

如來は何故に吾等衆生を無爲本然の淨土より有漏生死の世界へ出し給へるか、そも人生と淨土とは如何なる關係を爲すかを一考せされば人生の眞意義及如來の本願を領解する事能はず、釋尊の出世は全く此の一大事因緣を明さんが爲めである、大ミオヤなる阿彌陀佛は大慈悲に在ます、大慈悲の故に一切の子等を育み如來力を現はさんとの聖意より種

々に善巧方便を以て子等を訓練養育し給ふ。辨榮聖人の道詠に

天地の萬の設備たまはるは
　　子等を育まん御旨とは知る

一切衆生本より本然の淨土に在り乍ら之を知らず、人は夜ありて晝を知る如く生死界ありて涅槃界の尊さを知る、實に人生は如來力を現はすべき一大試練の修行土である、斯く心得る時苦樂親難皆悉く衆の育、恩寵と感ぜさるを得ない、人生は此の目的を以て大悲本願所成の世界一切の子等の上に極樂世界顯現護與せんとする大聖意志の發展活動と見るべく、實に此土の一日一夜の修行は彼土の百歲に勝れたりとの經說も、要するに此の本願聖意を示されたるものと合點する事が出來る。

○　墮されて怨むな起てよかけ登れ
　　獅子の兒ちやぞよ豚となるなよ。
○　可愛子を旅さす親の心をば
　　くみて知らるゝ彌陀のおん慈悲。
○　にくからぬ我子に肉の旅衣
　　着せしは修行させん爲かな。
○　一人かと思ひし旅にかげながら
　　ついて離れぬ彌陀は法藏。
○　極樂の彌陀が子をつれ法藏の
　　意志となつて修行さすなり。
○　本然の淨土を子等の上に

顯現さんとて彌陀は法滅。

○泥洹の樂屋は彌陀の本國よ
　舞臺は法滅の意志顯現す。

○本然建立淨土の樂屋につゞく顯現の
　極樂舞臺本一つ家。

○舞臺をば假のものちやと思はずに
　只眞劍に役をつとめむ。

○人見るは舞臺樂屋にあらずして
　つとむる役の伎と眞劍。

○汗齊彌陀の功德に化へられて
　おのづと實る極樂の靈。

○働いて功德頂きお金まで
　不求の自得は二重御利益。

○本然の御國を子等に與へんと
　斷えず働く法滅の意志。

○靈に覺め肉に働くそは彌陀の
　誓願現はす菩薩行なり。

○靈に今覺むると云ふは本然の
　ミオヤの淨土の御子と自覺ること。

○働くと云ふはミオヤの誓願に

身をさゝげてぞ盡すことなり。

○躰現さん意は彌陀の聖意にて
　つとむ力も彌陀の願力。

○命をば終へて淨土（本然極樂）に歸りては
　また還り來て光榮現はす（顯現極樂）

○願力に乘りて聖意の共まゝに
　往きつ還りつ使命果たさん。

○幾度か生れ／＼て務めなむ
　ミオヤの建てし淨土現はさん爲。

○靈をもて通ふな泥洹無爲の國
　そを現すは此身此土よ。

○法滅の聖意承けて淨土をば
　現す務め爲すは菩薩よ。

○泥洹の道に次ける修行土にて
　菩薩となつて次は佛よ。

○法滅と彌陀と離れぬその如く
　娑婆と淨土は舞臺樂屋よ。

○果の彌陀は彼土に在りて法滅は
　因位の我と共に御修行。

○法滅の筏に乘りて誓願の

必至無上の彌陀の果の國。

（八）ミオヤの世界

吾等本よりミオヤの世界に在り乍ら之を知らずして徒らに闘爭苦惱を以て五濁の惡世と爲し、又無量壽の御國の中に只はかなき肉の一生を以て無意義に終る事の哀れさよ、然るに一度ミオヤの子なる事を覺ると共に同胞共に唯一のミオヤの聖意に隨順活動する處にミオヤの世界は即吾等の世界と顯來る、要するにミオヤの世界は唯一の如來を中心として同胞共に聖意に依つて向上的活動を爲す處に顯來する聖き御國である、之吾人の理想であり、又之れ實に如來本願力の發展である、ミオヤの世界とは、即靈格的大日本の活動顯現である、大とは宇宙周遍の義、大宇宙の中心靈格たる彌陀の靈日は一切を向上進化せしめんと不斷の活動を續けてゐる。

吾人の信奉する光明主義は此の彌陀大靈の日光に育まれて靈化向上の一路に立て使命の任務を肉の一生に捧げて各々全力を盡して活動精進せんとするものである。

聖意の現はれ

（鄭榮聖人御作）

聖なる聖名を稱ては　聖意の現はれ仰ぐなり
如來の無上恩寵を　我らが感情に滿しめよ
如來の神聖なる聖意　我らが良心を照しませ
如來の正義なる聖意　我らが意志に現はれよ
至眞にしていと聖き　靈國よこゝに格れかし

至善にしていと聖き　靈國よこゝに格れかし
至美にしていと聖き　靈國よこゝに格れかし
我をすべての同胞と　安き靈許に在らしめよ

（九）闇、月、日

如來は日昏なき日の光明王に在しませば如來の世界は常住不斷眞實にして光明遍照十方世界なれども、其の世界に在り乍ら闇の生活と月夜の生活と更に曉より晝の生活へと進める三種類の機がある。

一は無信無自覺にして肉欲我欲のあさましき惡業に引かれて自ら闇の中に苦惱の世界を造りつゝあるもので之れが罪闇惱の生活である。

二は月夜の生活とは未だミオヤの世界の靈日を拜せねども教に依り人に依つて信仰の明るみを覺え、さながら從來の闇夜より月夜になりし感を以て現在より信仰生活に入るもの。

三は光明獲得に依て靈の眼睛となり七寶靈の花開き靈天の曉には如來の光明を實感し此處に居りながら靈は淨土に棲み遊ぶ眞晝即眞の活動世界に在り。

光明主義は光明獲得心靈更生を力說して第三の晝の世界を我等に得させんとの叫びであるが世の多くの信者と云ふは概ね月夜の生活であつて晝の世界を死後に期してゐる、然しそれが普通一般の止むを得ざる多數の現狀かとも思はる。

月夜より曉の晝の世界となるには一時曉方の闇がある如く死は一時の闇である、世人多く死を永眠と云ふが然しそれは無信の人に於てこそ闇より闇に入る者で死に依つての永眠

でなく無始以來の永眠をつゞけるものであるが、既に確信に依り念佛の生活に在るものはたとへいまだ甚の實感なくとも月夜の生活にあるものにして、死は曉方の一時の間に過ぎず永眠にあらずして永覺の前提とも云ふべし。

無始以來永眠せし己が心靈が光明王の甚の世界へと覺めて本然の淨土我が古里の朝ぼらけとなる事を思へば吾人の死は死にあらず永眠にあらずして永覺である。正しく大活動の開始せらるべき甚の世界への誕生である、躍進である。不斷の精進開展せられそこに眞實の極樂はある。

○ 永き夜の眠もさめて晴れ渡る
　十方世界大日本國

○ 日昏なき日の大神は光明王
　照らす世界は大日本國

○ やみつきもあけてうれしき日の本に
　ミオヤと共に斷へず働く

(十) 日本の使命

人には人の使命がある、國には國の使命がある、地球には地球の使命がある、太陽には太陽の使命がある、各々其の使命を全ふする事が唯一の大ミオヤの本願に隨順する發展の大道であり活路である、若し其の使命を自覺せず本願を無視するものは滅亡の途を走るものである事はミオヤが一切を攝理し給ふ自然の法理である、我日本はミオヤの世界を全地球に顯現すべき一大使命を帶べる事を自覺せねばならぬ。即全地球を擧げてミオヤの神の

光明中に一切を覺醒、親和、共働、向上の光明土と爲すべき使命を大ミオヤより受けて居る事に氣付かねば眞の國民的自覺ではない。明治大帝は

四つの海皆同胞と思ふ世に
　など波風の立ちさはぐらむ。

朝な夕なミオヤの神に祈るなり
　我國民を護りたまへと。

ミオヤの神は只に日本國民のミオヤでなく全世界のミオヤに在します故に一切人類は平等にミオヤの子にして皆同胞である。

ミオヤの神は蓋し是れ宇宙唯一の大日輪日昏なき日の大神に在しまして之を無量壽光明王とも阿彌陀如來とも申す、而して其のミオヤの神の神靈を宿す宮は人にありては念ずる人の心殿であり、國にありては國の中心國家攝理の正しき立憲精神を宮殿として宿ります、地球に在りては正信本願の活動國を選擇してミオヤの大神靈は宮居とし給ふ。

活眼を開きて全地球を眺めよ、ミオヤは今何處の國を宮ゐとして全地球をミオヤの世界とし神德を全人類に及ぼさんとし給へるかを、今や我が日本は大ミオヤの本願聖意の大使命に覺醒して振ひ起たねばならぬ時機が到來しておるのではないか、各々法劍を取り法憧を建て法鼓を打ち法螺を吹き法電を燿かし光明軍の新陣容を整へて世界の舞臺に立つてミオヤの世界を地球人類の上に顯現せん事之れ唯一の活路に立つ國民的自覺にして無上の光榮である。

(十一) 國法的に靈養期間を一切人に與へよ

今や職業難の聲、失業者救濟の叫び喧し、衣食足つて禮節行はる、先づパンを與へる事が必要であるがそれと同時に只に日常生活の經濟的救濟のみを以て足れりとすべからず、一切人類は皆平等にミオヤの子である限り其の子たる心靈的生命を養ひ向上發展を計る事こそミオヤに對する唯一の忠又は孝の道である、然るに彼の勞働者の月夜勞苦に靈養の暇もなく闇より闇に入る哀れさを默視してミオヤに申譯があるか、宜しく國家はミオヤの前に大懺悔と共に一般人民に少くなくも年一回五日間位の連續靈養期間として眞劍なる修養を與へ萬民等しく靈に生き御子の光榮を肉を通して喜び働く事を得てこそ眞の平和發展はそこに開けミオヤの世界は此土に顯現する、よろしく國家の爲政者、資本家は此所に心を用ひ之が實現を計られん事を切望して止まざるものなり、實に日本の理想は大日本の顯現即ミオヤの世界を一切人類の上に現はす事が大ミオヤより授かりし一大使命と確信するまゝを今此所に警告する次第である。

(十二) 因緣の電線架設と六通無礙の靈電局

緣なき衆生は度し難し、辨榮聖人が米粒名號に又は佛畫文章等に依つて因緣を結び給ひし其の數は幾百萬なるを知らず、蓋し斯く聖人があらゆる機會を以て多數の因緣を結び給ひし事は廣度衆生の大悲より出でしものにして聖人は大正九年十二月四日遷化し給ひしとは云へ實は愈々六通無礙の法身を以て靈電本局に入りて今迄作り置かれし因緣の電線を通して各人の上にスイッチの運轉一つの時機到來を待つて救濟の光を通し給ふものにて寧ろ聖人の御活動は滅後に大活動は開始せられ今や全世界に向つて光明主義の一大發展の機運となれる事は正に其の證である。聖人御作の「のりのいと」の歌を讀む時一層其の感を深くするのである。同歌の一節に

この露の身はこゝかしこ
しばしがほどは別るとも
心はすゞの緒を通し
同じさとりの身とならん
のちこの經をよむひとは
おもひ出すらむ花の上に
なかばをちぎりしこの友を
ふかきまことの友として（云々）

聖人は今現に生きて在して因緣衆生の救濟に暫の御やすらひもなく法身無礙の靈電局に在して十方世界に六神通を以て廣度衆生の益を施し給ふ事の尊よ。

先たゝば後れし人を待ちやせん
花の臺に半のこして
生れては先づ思ひ出ん古里に
契りし友の深きまことを

の道詠の意眞に有り難くこそ味はひ覺ゆれ。

(十三) 同胞樂

吾等は皆三身一如の大ミオヤの子なる事を信ずる時一切の人類は共に親しき同胞として愛せざるを得ない、而して同胞相携へてミオヤの聖意を奉體して各々其使命に精進する事は

樂みの中の樂みである、蓋し聖意とは一切を進化向上せしめて眞善美の聖國を五濁の中に顯現し、やがては無爲本然のミオヤの淨土に一切を攝め取らんとの大慈悲の本願なりと信ず。

唯一のミオヤをミオヤとして親子相親しみ人々共に同胞として相愛し、同一理想に向つて各相携へて使命の爲め献身の働きを爲すは樂しき極みである、之れ吾人の所謂同胞樂である。

○ 親と子の心に隔てなき時は
　いづこも無爲の都なりけり

○ 同胞と思へばうれしなつかしや
　此世からなる一蓮托生

○ 本願にめざめて命せ精進つゝ
　自然に歸る無爲の本國

○ 歸りてはまた還り來てつとめなむ
　命せの務盡未來際

○ 共々に聖意のまゝにハイ〳〵と
　命せつとむりやそこが極樂。

○ 極樂は親同胞と親しみて
　愛し働く樂しみの里。

○ 極樂につとめ〳〵て親の跡
　ついで三界我荷負なり。

○ 三界を荷負て立つぞ佛なり
　一切衆生はおのがいとし子と見ゆ

○ 子の爲めによかれ〳〵とはかるより
　外に佛のはたらきはなし

○ 子の爲めに千々に心を碎きては
　不取正覺の菩薩とぞなる

○ 法藏が阿彌陀と成つて又彌陀が
　法藏菩薩と成りて助くる

○ 法藏が阿彌陀と成りて彼の國に
　彌陀法藏となりて此の土に。

昭和五年十二月

病床に臥し此稿を書く

仙界

（宗祖と光明主義）

一、本尊に就て

宗祖の信仰に於て阿彌陀佛は諸佛隨一の樣に見ゆる所と、根本としての彌陀とせられたる所とある。光明會に於ては宗祖の大原問答によつて諸佛の根本たる彌陀を本尊とす。

二、光明獲得に就て

光明とは慈悲の事である。慈悲は獲得せらるものである。吾人は光明獲得を求めて進むべきである。獲得を求める事が如來の慈悲の救濟を求むる事である。觸光柔軟と云ひ光明攝化と云ふ事は要するに光明獲得にて、慈悲の救濟を蒙る事である。

三、救濟と往生

慈悲に觸れると云ふこと。即ち救はれると云ふ事が只未來にあると云ふのでなく此世から續いて行くものである。其の救はれたことを往生の感じと云ふ。感じと往生の果體とは分けて話すが、往生の感じ即無生の感は、此世から現はれるものである。從來はそれ等を全然死後のものとせり。往生の意義も斯くて明了にするが宗祖の精神がボンヤリして置くが祖師の意が果報體の上より未來處不退に約してあるけれども、宗祖の大原問答には往生を無生と解し、問師の一枚起請の註には無生を三通りに設けて見生無生の往生即ち現世に永遠の生命の感じが現はれてくる事を示されて居る。

四、靈肉の救濟

從來は佛の救と云ふことに就いて肉身の救濟と云ふことは說かなかつたが、光明主義は靈肉共に救ふことを明す。然し肉の救はれると云ふ事は、法然上人も意味を大經釋消淨光

の下に財色の二欲を除くと云ふことを述べられてあるが道ならぬ色欲の除かる如きは肉の救と云ふべきである。

五、救濟と現實生活

佛敎は現實生活が眞に生きてくると云ふ所に救の事實が認められる。然るに從來の敎は生活と沒交涉である。宗祖は信仰獲得上には勇みありて物憂からずと云はれた。此の精神を光明主義に於ては尤も明に發揮するものなり。

六、別時行儀

光明獲得は別時行儀に依つて尤も速かに顯はれてくる。光明會が別時を奬勵すること宗祖が別時を勸められたと其精神に於て一致せるものなり。

七、法式行儀

之に就いて禮拜儀を用うるは行儀に於て異あれども、如法別時の時は總べて平生と異なると云ふことに於て差支なきものと思ふ。平生に於て從來の慣例に依るもまた可なり。

八、光明主義の標榜

從來の往生淨土主義と相違せる樣なれども、往生淨土と云ふことは光明攝化の完全成就せられた事を云ふものにして光明攝化をはなれて見るものでない。

尤も現代人が欲求せる現在靈化を標榜して未來往生淨土を實現せんが爲め此の名を用うされば往生淨土と矛盾したものではない。淨土敎は現在の利益を云へば光明攝化、未來の果體より云へば往生淨土である。

九、見佛及其目的

見佛と云ふ事が最も誤解を招く本になりて居るが、見佛は其意味廣し。即ち佛と云ふものを身と心とに分くれば、身の上に眞身と靈應身となる。心の上には慈悲と智慧がある。

見佛
- 身 — 眞身 / 靈應身
- 心 — 慈悲 / 智慧

故に別時行儀の特長としては、其の眞身を見奉らんと求めて進む事が宗祖の精神にして我等も又此意地に住して別時を行する時に、明かに慈悲の光明を感ずる事が出來る。機に依ては智慧にふれ或は靈應にふれ、進んでは眞身にふれる人もある。然し何れにしても佛にふれると云ふことは事實にして徒勞でない。其目的とする所は慈悲を藏いて所謂光明生活を實現せんとするにある。即ち平生の念佛生活を强調せらるゝ所にある。

十、念佛の功德

從來誤解せられ易かつた。今光明主義に於ては念佛の功德は、靈化を受けることを說く念佛すればそこに增上緣として如來の德が頂ける。光明名號攝化十方と云ふことは即ち光明靈化の念佛の功德を明らに示すものである。

極樂は無爲泥洹の道に次げり

彌陀法藏としての意志の力は衆生を通して永恒に活動して衆生を攝取す。故に極樂は根底は一なれども衆生の上に顯現する事は衆生を通してなり。其點より極樂は共顯又は共生と云ふべし。

往相——別時念佛、三昧の一行は本然の靈界に入らんことを先とし（十八願）生因

還相にして又自然の往相——平生念佛は生活即念佛の心に立つ（十九願）體現

壽終の後本然淨土に入る故に（　　）來迎

果上彌陀——本然の淨土は一立古今然——大ミョヤの自然獨創

因位法藏——本然の淨土現はれたる所極樂となる。

其の顯現は法然の願行に依つて顯現す。

法藏の願行は衆生の上に流れて絕へざる活動となつてる。

往還二相、靈肉一致第三帝國

一、肉の世界＝娑婆＝肉我鬪爭の惱＝先づ醒めよ

二、靈の世界＝淨土＝仰で靈光に活きよ＝往相

三、靈肉一致の世界＝淨化＝還て肉に働け＝還相

佛敎の所說は活きると働くの外はない。よく人は生きる爲めに働くと云ふが、なかなか肉體は丈夫でも働けないのである。それは靈に生かされてないからである。それで私共は働く爲めに先づ靈に生きよと叫ぶのである。最も肉慾の奴隸として又主義の爭ひの爲めに朝から晩まで働いてゐる者はあるが、それは動物の生活であり修羅の日暮であつて、爭と惱みとあつて何等價値なき人生である。如何に科學百般の文化は進んでも、要するにそれは肉我の慾を恣ひまゝにするに便利を與へるまでゞあつて、かゝる生活狀態の世の中を娑婆世界と云ふ。この無價値の人生盲目的生活より先づ目醒めねばならぬ。

即ち之を覺醒せしむる聲が釋尊の敎法である。そして價値あり目的ある人生たらしむるのが如來の救ひである、光明攝化である。

如來は我等の心靈を活かすべく心靈界の太陽として今現に宇宙の中心、我が眞正面に在

します我等は須く靈光を仰いで靈に活きねばならぬ。辨榮聖者は實に此の靈光に活くべき道を懇切丁寧に教示された。

活かされた靈は肉に還つて働くは活靈の化用として娑婆に向ふ還相。然して靈肉一致の精進生活に依つて娑婆が淨土化されて理想が現實へと展開し來る淨化向上の世界が所謂靈肉一致の第三帝國である。其の美はしき精進努力の帝國は神聖正義恩寵の如來統監の下に活靈活肉すべてを捧げて淨佛國土成就衆生の大業に一兵一員の奉公を盡すのである。そこに自己の人格が充實して來る。元來淨土教に於て極樂に往生すると云ふ事は、無礙自在の活動に進む爲に先づ淨土法身の身を成すのであつて、其の上に化用としては因緣に任かして十方界に還つて、度人天の活動を爲し、長時長劫に慈恩に報答すべきであつて、淨土往生の身を成するは永劫に慈恩報答の活動が目的である。卽ち働かんが爲めに法身と成るのである若しも極樂の受樂無間なるを聞いて樂を貪らんが爲に往生を願ふものあれば、それは眞實の淨土ならで墮落の世界に落ちる者であると教へられてあるが、若しも光明會の信者などでも念佛三昧に依つて單に陶醉的法悅氣分のみを目的に喜んだり、又たは一時的の種々の靈感を得て喜ぶ事を知つて、肉に還つてミォヤ照鑑擁護の下に精進淨化の向上がなかつたら墮落念佛に落ちてゐると反省しなければならぬ。或會では恰も尋常小學校から退學させて直に實務につかせ働け〳〵と云ふ樣な遣り方あり、光明會はもつと立派に活きよ磨けと活きる事に力を入れ、前者は働くことに、後者は活きる事に偏してないかと思はれるが、之は要するに往還二相を暫く分擔的に進んでる形と思ふ。つまり靈肉一致の淨化精進の生活となるべきである。而して此の淨化精進の世界の因緣つくれば、淨土法身の身に歸り、

淨土法身の身は化度の因緣に任かして十方に分身し、長時長劫に靈肉一致の淨化精進を繰返し繰返して、慈恩に報答する者と信じかつ期する所である。

辨榮聖人のだはまく（人生歸趣四五七頁）

「彌陀は靈光赫々として我らが心靈を照し給ふ。我等は聖名を稱へて聖旨の現はれを仰ぎ靈光に觸れて初めて靈に活きることを得ん（往相？）而してのち淨化の光榮を身に口に現はす樣に爲つてミォヤの聖寵に報ひ奉る（還相）べきものと自ら信じて世の同胞衆におすゝめ申す所以である」と。

されば佛光照擁大悲の下、念念靈光に活きて念々肉に還り、精進不斷の淨化を樂むは是れ極樂の樂にして、この心にならして頂いた事が極樂の靈と活されたのである。あゝ難有きかな。

（昭和三、五、三一筍庵）

（食時の感話）

そして私の家庭では此頃朝又は夕食の時五分間以內で靈の糧として法話をしてゐます。至極結果がよいやうでありますから乍恥其の二三日分を記して見ませう。

五月廿二日朝　靈の糧の話

肉體を養ふには團食とて形ある物質の食料を胃袋に取り込むが、靈を養ふには念食。人は念はずには生きてゐられない。此念と云ふ心の胃袋の中に攝取するもの如何に依つて靈を害し又は靈を養ふことになる。大概ロクなことは考へてゐない。念ひと念ふことは三惡の業を作り出す念である。經に「一人一日の中に八億四千の念あり念々の中に所作皆是三途の業」と云へり。今食事の時に南無阿彌陀佛と稱へて食すれば自ら心の念に佛を念ふ。

佛を念ふ心にアミリタとて我等の心靈を養ふ如來の靈德が頂けるから心靈的活力が增進します。肉に生き靈に生き、そして眞生の向上をはかりませう。

五月廿三日朝　眞生の話

眞實に生きるとは光明主義に於ては光明生活とて、如來樣の照護監督を仰ぎつゝ、アナタの子として仕へさして頂く心持になりきれたら眞實に生きたのである。雛子が親雞の護を受けながら親についてまはる樣になつたなら卵子と違つて眞實に生きて來たありさまである。

念佛の人はいつも如來樣の人格を中心としての生活、更に言へば自分の眞正面にはいつも一人の親樣の在します事を深く信じ深く愛慕して、アナタの聖意のまゝに働きたいの心になるべきである。それで眞に生きたか否かは日々の作業上に試驗が出來る。喜んで働けるか否か、仕事に甘い味が出て來たか否か、如來への奉仕故如何なる作業も有難く感じてつとまるか否か。

眞正の活動は作業までが靈の糧となり、永遠に生きる靈的自己の人格を充實する尊い働きであり作業である。

五月廿四日朝　向上の望

人は不斷に向上的希望がなくてはならぬ。望無き人生は死骸た等し。勿論のぞみと云つても向上的のぞみ、向上とは如來の人格を目標として進み、如來の人格の如き完德とそして無礙の活動。願はくば我も人も共に共に淨に化して佛國壯嚴の生活へと斷へず厭惡進善し、日に新日々に新に改善進步のぞみを持つべきである。おれはもし何ののぞみもない腹一杯食ふて寢たけりや寢る起きたけりや起きるばかりと云ふ人あらば、其は動物として

ののぞみであり生活である。如來の人格を中心に進む者はよろしく眞生の向上を祈るべし向上なきは眞生にあらず。眞生は斷へず向上の祈を以て運む。望あり祈ある者には如來はいつかそののぞみをかなへさして下さる。

五月廿五日朝　めぐみと感謝

如來の御恩惠と御力とに依つて生き働きある事を感謝する事は如來の子として眞に生きた信仰の自然である。感謝もせずに甘いとて煩惱を恣にし、甘くないとて怒るのでは動物生活。どんなものでも難有く頂く心にならしめて頂ひたほど幸福な事はない。まづいものなしに喜んで頂れるのは確かに生きた信仰の一の象徵である。一粒の米にも天地一切の恩がこもり、一切人のお蔭がついてゐる。粗末にしてはならぬ。此の感謝の心から肉を通じて現はれる行動が如來への奉仕行であり、一切恩に對する報恩行。そこになれば爲す仕事もおれがするのでなく、恩力でさして頂く、お蔭で〳〵と喜んで働ける。即ち利己的小我より脫して今は御恩の中に身を投じ、如來の前一切人の前に身を投じ如來の前一切人の前に身を献げた無我報恩の實生活となる。

（人生と淨土）

如來は何故に吾等を無爲本然の淨土より生死界に出し給へるか。そも人生と淨土とはいかなる關係を有するかを一考せざれば人生の眞意義及び如來の本願を領解すること能はず

如來は大慈悲に在すが故に一切の子等を育み如來の力を現はすべく種々に善巧方便を以て子等を訓練指導し給ふ。一切衆生本より本然の淨土に在りながら之を知らず人が夜ありて晝を知る如く生死界ありて涅槃界の尊さを知る。實に人生は如來力を現はすべく一大試

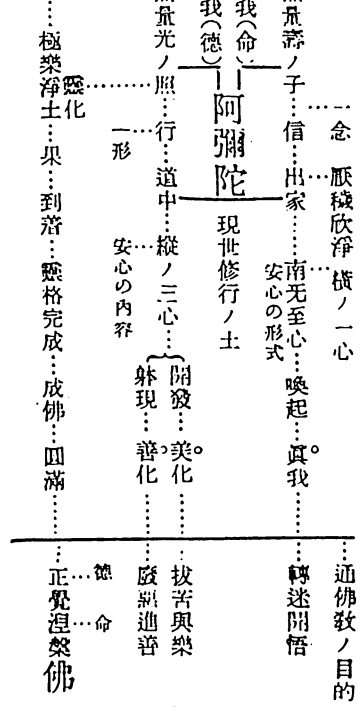
練の修行土である。斯く心得る時苦樂親雜皆悉く發育の恩寵と感ぜざるを得ない。人生とは此の目的を以て大悲本願所成の世界と見る時此土の一日一夜の修行は彼土の百歳に勝れたりの經說を領得することを得。

（寺院に對する所感）

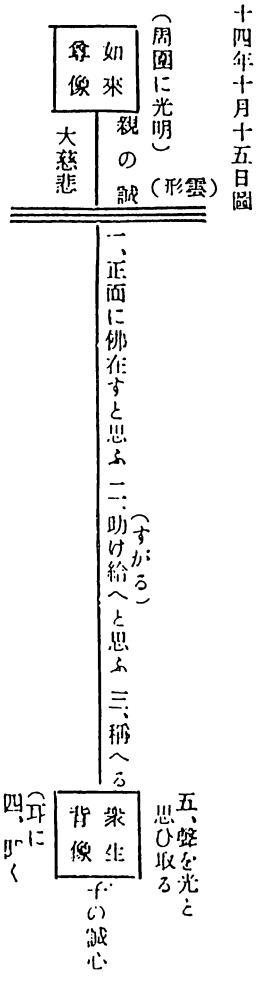
一宗制度を變革して寺院を教化組織に改むべきこと。一、生活本位の現狀を打破し、寺院をして教化組織に革むべく一宗制度を建て替るを急要とす。二、一宗併倡に信仰の眞生命を缺けることと教化組織の不成立の二が原因。

之を打破するには宗倡が如來光明攝化を蒙り活信仰に入るべきなり、又教化組織の基本として寺院財産を一宗財産と革め同時に人物活用と適所配置、

往生



十四年十月十五日圖



往生想
- 正面に佛在すと念ふ——すがる思で——御名呼ぶ——（往想）
- 聲を聞く——光と思ふ——（還想）又繰り返す

名號に就いて往還二想

往想（衆生より）：助け給へ（阿彌陀佛）——歸命想（就人立信）——、回向發願心）

還想（佛の方より）：助け給ふ光明名號）——往生想（就行立信）——（深心）——思取る

光
- 躰
  - 色——（法身）——どこにもある生成進化の力
  - 心——（報身）——念佛衆生攝取不捨
- 相——はどこにも在すけれども罪障の雲とれねばわからぬ

太陽の相は見ねども明くなつたは太陽の光にふれ光中に居る如く、聲する所、光の中、然しそれだけではならぬ、中心に嚴臨し給ふ靈的發光體の御相を拜するの念ひを肝要とす

ハンドルを握る、乘る、踏む、の具合ひ

往生すと思ひ取ること緩なれば未來往生主義となり急なれば見佛想現生往生を願ふことになるべし。

○

一、信仰篇——念佛生活（信佛精進）

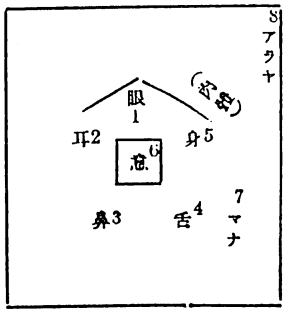
二、修養篇——稱名靈化（成就衆生）——（人格向上）

三、社會篇——共生淨土（淨佛國土）——（共業所感の改善進化）

（刑に服せる人へ）

同じ如來の子としてありながら罪に泣かねばならぬ貴方の現在に對して心から同情に堪へない。深い淺いの相違こそあれ罪に泣く身は私共も貴方も同じことだ。だうか屆く罪に服してくれ。刑期が濟んで世の中に出たならば何よりも先づ私を訪ねてくれ。今私は一個の貧書生に過ぎないけれども若し貴方が世の中に出て、世の中のすべての人が共に如來の慈悲の懷に抱かれたいと心の底から祈つてゐる。その日の來るために身體を大切にしてくれ。

心



第六意識が眼耳鼻舌身を統一する所に小我城を構へて實我と執する誤謬を第七（末那）とす。

識に眞如薰すれば阿賴耶が大圓鏡智となると雖、實大乘に於ては元來如來藏卽ち一大眞如中なれどもそれを知らずして居る凡夫の心の本體を阿賴耶と云ふ。

今斯教はビルシャナに二屬性あり。一切知——（知覺——伏能ある故）と、一切能——（運動——發達ある所以）

衆生性の本質（個性の本質）を指して阿賴耶と云へり。

絕待は一切知一切能に依つて自ら常恒に動いてゐる。そこに因緣因果となつて世界性となる。

（病中說法隨聞記）

靜道

十二月十五日　新入の田中齊氏と廣島の森政夫氏（中佐）の御二人への慈菩薩記

合掌十念。

ここが極樂長安寺の座敷とのみ思ふなよ。御淨土と思へぬは魂が寢つてゐるからである光明遍照十方世界。御天道樣の光によりて私も皆樣も同一光明にあり乍ら目を閉つてゐてはわからない。今の今遠方では無い此處が如來樣の大光明の裡である。如來樣の在します事をあやぶむであらう。然し御釋迦樣の敎により死なぬ生き通しの靈にさして下ださる。子を親樣と同一の御果報にして下さる。

南無阿彌陀佛と申せば親子同一になる、夜が明ける。「聖き啓示を被りて三摩耶の窓開く

れば」とは心の目の明ける事である。魂の目は親様によりて開けて頂く、一度開くれば明け通し。魂の目の明け通しとは無量壽にして無量光なる日の暮れる事のないお世界。今もその世界にゐるけれどもこの肉の目で見てゐるから生者必滅會者定離、然し一心に御念佛すれば私共は如來様の死なぬお壽、極樂の魂となして頂く。卵子は自分の力では育だたん卵子は死んではゐない、親鶏の羽がいに三七廿一日の間暖められて生れ更つた相となる。私の心の目は卵子の様なものである、ねむれるものをよびさまし、育てゝ下さるのが如來様。愈々如來様の御力を頂けば三明六通無礙自在。

夜は靜なものである、鳥でも巣でねてゐるが夜が明けるとジートしてはゐられない、「チーチク、チーチク」とさへずつてアッチ、コッチの枝から枝へ、喜んで大空さして飛び廻る。

働く事が大事。百姓もつまらんと思ふが魂が生れば有難い。鏡金での仕事でない。如來様が一切をおまかないをしてござる、その御手づだいをしてゐると、喜んで働ける。喜んで働くは極樂の眞たゞ中。

極樂は日々近くなりにけり、あわれうれしき老の暮かな。

佛様は照り通し護り通しで眞正面。佛様の御心は天地一つばい、私のする仕事も念ふ事も如來様が全部知つてござる、それが極樂まいりの道。これが私のしまいの說教。

合掌十念。

十二月十六日夜、篠振主婦會員約四十名への御說法。

一同合掌、十念。

三日間おそければ今日が無かつたであらうに、今晩皆様にまみゑる。生れ在所の御恩の

村に及ばず乍らこれから村の爲めに盡くさして頂きたいと思つたが、再び顏や聲では……まだ會へると思ふ。それは大きな油斷、私が今日あるは如來様の御力。

行く手が暗い所ではない。どんな人でも前生の業を果す爲めには果す丈けの業を果たさねばならん。然し重い病氣も輕るく、苦るしい事も樂にさして下ださる如來様。六十日の今日まで病の床に就いてゐるが是れも如來様の尊い御慈悲。私がお勸めしたいのは、人間は「我が」の力ではいかん、達者な間だけでもいかん。大丈夫の心、喜びの生活にさしてゐたゞかねばならん。近來主婦會の御盡力本當に喜んでゐる。主婦會も信心の上に御恩喜ぶ心からする仕事なら、活動潑剌も麗しい活働となる。信心の上から家庭全體の人が喜ろこんで立ち働く様になられば國も發展する。それには寺の住職が大事。私は田地を荒して來たが本當に皆様にすみません。

今こうしてゐるのは如來様の廣大な御慈悲の中に生かされてゐる事である。佛様と云へばどこか遠方と思つてゐるが、極樂は遠い向ふばかりではない。あの御天道様が無ければ草一本も生へはしない。如來様の大慈悲の中なればこそこうして活き働き在る事が出來るのである。

昨日も某女が來られ枕下に來て、この棺と私の顏を見比べて、「和尚さんあんたは何ちう事で御座いまするな、私共を殘して先に行つて私共はどげゑしまするない」と泣かれ時。「死んで行く用意の棺と思ふなよ、アリヤ御淨土に生れる時のうぶ湯たらいと話した。今も如來様の御慈悲の光明の中にある。けれ共親様の懷の中と云ふ事が明らん。ここに皆様がわかるのは電燈があるからだ。いくら電氣の光があつても目をつぶつてゐてはわからん。それと同じく心の目がつぶれてゐては廣大な御慈悲の中光明の中である事が明からん。

天の日は目でわかるがこの目もつぶれる、日も目も始めがあるからつぶれる終りがある天の日は如來樣の廣大な親樣の御慈悲である。仕事の上に、又、子供を育てるも矢張大しオヤ樣のおほせ附けられてた、御慈悲のあらはれである。この目もあいた時があるからつぶれ、日も亦つぶれる。更に光明遍照の大光明の日輪如來の光明。その親樣の光明の心眼開らくれば、ここも親樣のお世界。この魂の目が開らけすにゐるから親樣の光明の中である事がわからん。魂の目が開らかぬから暗から暗。一水四見と魚は水を空氣の樣に思つており、ガキには水が炎と見へる例の如く自分自分の業の境界にしか見へぬ。同じ光明の世界にあり乍ら、親樣を知らぬ人には夜の樣に見へる。人間が見ればきたないものも犬は喜ぶ。この目で見ては御恩御恩づくめと云ふ事がわからん。

同じ仕事でも只飯を食ふため金の事のみと思ふてはならん。實はその御仕事が悉く菩薩行報恩行である。この身でも如來の身。遠者の時には大根でもバリバリ食へるがさて病氣でもすると食べられぬ、己が力では無い。食べたものが血肉となるはこの身の中に絕へず如來樣の法身の御力が働いてゐる。佛は外ばかりではない、この身の中にチャント阿彌陀佛の法身の力が働き親樣の御蔭で生きてゐる。

お寺へ參ゐつて說敎をきく、昔々法藏菩薩樣と云ふ御方が五劫の間御思案下され長載永却に御修行下だされた。昔々と昔話に聞くが、實は今人間と生れて人間に迄に御育て下ださるには長載永劫のあなたの御力がかかつてゐる。生物進化し、萬物の靈長と迄育てられるには久遠劫來よりの親樣の御手數がかかつてゐる。只の世界ではない。あなたのお世界も、私共も親樣とまでお育て下ださる。篠振の田代數士の御不幸、廿一歲の今日まで育ての親心、定めし兩親はおなげきの事である、如來樣も私共を人間にまで育だてるには容易

ならぬ親心が通ふてゐる。親樣に目覺めず暗から暗に落ちる事はどれだけ親樣はおなげきでせうか。

今も親樣の懷の中。親樣の御育て。御恩にめざめ使命のつとめを爲す事が人間として生き甲斐がある。

信心も聞き方、此の世は浮世三分五厘、いいかげんにやつて、馬鹿正直に、太く、短く面白く、それは誤り、實は御修行。此の世は如來樣のお仕事をお手傳ひさして頂く修養の道場じや。仕事とは、如來樣の御使命に仕へる事で、わたくしごとの私事ではない。あなた方が野良で仕事する時はよごれてもかまわん仕事着を着て働く樣に、如來樣は可愛い我子に肉の衣を着せて下ださつたのは、あなたの御慈悲修行させんが爲めである。この身を仇やおろそかに思ふてはならんぞ。恩師辨榮聖人樣は御臨終の砌り「今にして時間の尊さを知る」と申されましたが、嗚呼この仙界は「今にして此の肉の尊さを知つた」此の世は芝居。あなた方が芝居を見に行くには、樂屋を見るか舞臺を見るか、そうじやない勤むる役に上下はあらうとも、その役の伎と眞劍が大事、日々のお仕事が皆悉く如來樣の御手傳ひ、みやづかひと喜こび勇んでたち働くが報恩行それが此の世のつとめにて、それが顯現極樂の舞ひと樂しくなつてこそそれで初めて菩薩行。見手は誰か、見透しは親樣が見てござる。共に〳〵手を引き合ふて進みませう。極樂に還つたきりではない。あなたの御力を頂きに、無爲の都の御殿で親樣の御位、跡を即ぎに、即位式に行つて來るのである。すぐまた宿願因緣によつて顯現極樂の舞のつとめに出て來ます。

要するに如來樣の御仕事をさして頂くのである。同じ働くのでもイヤでイヤで何時もブツブツ腹立、無慈悲で働けばそれが地獄行。肉欲我欲で働くは餓鬼。色氣食氣で働けば畜

生。虚菜爭ひで働けば修羅。然し爭ひも正義の爭は結構。義務で働けば人間。聖旨奉仕で働けば佛子、菩薩行である。御恩の中にあり乍ら、それを知らずおれが力でしてゐた事が、如來様の御力で今日一日働かされ仕事さして下ださる役配を受けてあなたの御蔭でと働く。同じ仕事を、不平ブツブツが有難有難と働く。一足一足極樂、仕事が極樂向きの仕事となる。そうすると仕事が極樂。一心に念佛して御功德を頂き喜んで働く、それが誠の信心。この世の仕事と信心と懸け離れのものでない。

愚痴の中の仕事でなく。御淨土參りの仕事ついて離れぬあなたの御力によりて仕事をさして頂くそれが誠の信心。

それであなた方主婦會の仕事をうるさい特別の事と思はず。文化の世の中に、皆様と一緒に喜び主婦會の仕事がそのまゝ如來様の仕事。

しぼる汗も膏も何處にも行かん、悉く彌陀のお功德に化へられておのづと實る極樂の蹟となして頂くのである。

あの稻でも稻の木は枯れても實は殘る、この身もいつかは枯れる時があるが、蹟の上には色々の實が結ぶ。同じ仕事でも心一つで六道行きとなる。親様の御育ての田地の中、如來の子とし實のらして頂きませう。同じ仕事でも地位も金も、名譽も望まない御恩の中と喜んで働く。こちらからは求めないけれども、親様から他から與へて下ださる。それが不求自得の二重の御利益。こちらが眞劍でやればよい。尊さは舞臺樂屋にあらずしてつとむる役の伎と眞劍。人が見て居様が居るまいが如來の目にはこぼる事なし。遇そかれ早やかれ結構な彌陀の實を結ばして頂ける。今晩はこれで失禮さして頂きます。一同合掌十念。

三十分枕邊にて念佛。

十二月十日　大辻炭坑眞宗の信者のみ初對面の御說法約二十名、先ず「聖きみくに」の聖歌を合唱し病床を四くかこんで、合掌十念。

今こうして人間として幾年間働かして頂く。信ずる人も信ぜぬ人も佛の廣大なる御恩の中に生かされてゐる。

御淨土の親様が五却の思惟長載永却の御修行により、今救ひの身になして頂いた。それを昔話に聞いてゐる。それも有難が、更に今私共がこうして生きた人の相形を頂いてゐるのは、とりもなほさず五却の思惟長載永却の御修行がここに現はれてゐる。人間と云ふ結構な身にまで育てられてゐる。之は私の力ではない。親様の御力親様の五却の思惟はどうしてここまで育て様か育て様かとの永い間の御手數がかかりてここに人間と生れたのである。生れる。それは近い所の御因緣は兩親の產婆。魚には人間の事が解らん。十月の間に人間となる。あれは天地廣大の長載永却の生物進化と人間とで育てゝ下ださる行き筋を永い間の事を十月の間に人間とさして下だされたのである。これ廣大の御慈悲の中の長載永却の御苦勞がかゝる事を示めされたものである。昔話ではないそれなら何の爲めに人間にまで育てられたか。同じ人の子でも頑是ない二つ三つの子には百圓冊も紙同様わからない育たないからだ育てられ育てられ、尊い我人間に迄育てられたのは天地廣大の遺漏ない親様の御力である。人間は力量丈けでない。萬物の靈長たる人は更に一段の永遠の親様まで育てあげらる事にある。

天地の萬の設備たまはるは
子等を育まん御旨とは知る

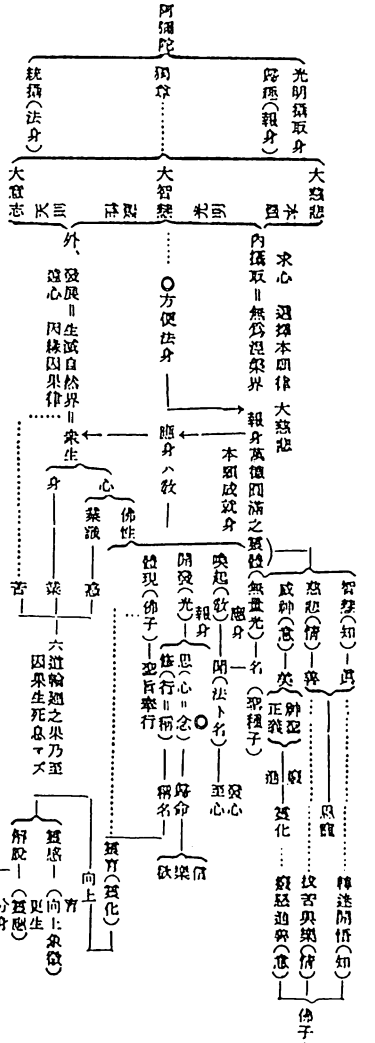
天もなければならん地も無ければならん。己れ我の一人では行かん、助けられ助けられつゝ、我等は酸素を吸つて炭酸を、草木は炭酸をとりて酸素をはく。活るも草木の御蔭。天地一切の力を集めてみれば親様の御力。姿を見れば五尺の身、實を思へば天地一切のおしかけが無ければ生きられん。親様の御恩。五劫思惟、永却の御修行を昔話と思ふなよ。今親様の御慈悲の懐の中にいだかれてゐる私。盡きぬ壽の中に生かされてゐるものが生死の夢にうなされてゐるとは。彌陀の本願聞かずして只寢て食つて孫子を殘してゆくとは。

早く目覺めよ目覺めよとこの身にまで近く、この世に釋尊となりて近く下りて下ださつた。親様の御恩。どうぞはぐくみ育つ佛と同體となる事を喜ばねばならん。

佛とは何處にゐらるるやらではない。親様に生かされてゐる。親様は攝め取りたいのやるせない心。育てられなければならん。第十八の御本願とは生かすぞ、生まれさすぞと云ふ事である。佛法の他力の難有いのは佛と我と一體となる事にある。お前百までわしや九十九までそれは別々である相對である、それはヤソ教である。お念佛は、あなた無量壽私も無量壽で。無限の極致は、偕老同穴の契でなく攝取同化の無上覺。佛と我と無對。南無と阿彌陀佛。炭と火。

妙じや不思議じや南無阿彌陀佛。炭と火と分ける事が出來ぬ。誰も彼も佛と成らして頂く。それなら佛は阿彌陀佛より外に無いか。十方三世の諸佛は法身彌陀に產み出され育てあげられたもの。本地は只一佛、獨尊統攝歸趣にまします彌陀御一體。

成る佛は多いが、成す佛は一。藥師如來に十二の願。釋迦如來の五百の願皆夫々理想があり、宿願因緣まちまちにそれぞれ諸佛の化用をば十方世界に現はして因緣の衆生を濟度



し給ふ。往相は佛と人と一つになつて使命を精進する事である。第十八願はどこどこ迄もそこまで上がらねばならん。合掌十念。次いで七覺支を如來様と一緒に歌いませう。

（病中所懷）

浅ましき我身思へば死ぬがまし
　御恩思へば死ぬも殘念
　　皆様方ぬ大事になされかし内が無くては御恩報じし出來ません

○

此度は必死必至の不二の山
　登りて見ればもとの不死霊

○

元來もミオヤの家にありぬれば
　何地へ去らん無去來の身は
やみぬれど唯深心（信）の奥底に
　斷へぬ光を拜むうれしさ
ます〳〵と己が醜さを感ずるは
　鑑化められたるたよりなるらむ
佛とは死なぬ我が身（鑑）のめざめにて
　宇宙一體照りぞ輝く
十年前誓ひしことを今こゝに
　はたさせんとて病むもおじひよ
無量壽の中に住みぬる鑑には

　死にも得られず死にたくもなし
初一念貫き通す一途が
　親の命せを立つる操か
助かつて居るぢやないかと法の師の
　その一言が今ぞしらるゝ
形見とて何もなけれどのこし置く
　言葉のうちに親の聖龍
肉の身は皆早やおちて南無したる
　今は阿彌陀にかへるばかしよ
本然の淨土にかへりすぐに還た
　光榮あらはす國につとめむ
ねむたくば眠りなされるお婆あさん
　ねむりこけても彌陀のおんひざ
永眠と人は云はめどさにあらで
　めざめて仰ぐ古里の空
永き夜の眠りさめたる心には
　死の闇晴れて永恒の輝き
永き夜の眠もさめて古里の
　まことの親に會ふぞうれしき
地獄へと墮ちる人さへ苦しむに

これを限りの苦とはありがた
臨終と我は思はじ臨産の
親の御苦労只感謝して
煩悩もついて來たけりやついて來い
ゆるすミオヤに鰐化たのまん
行足はよし進まずも信の手は
捨てぬミオヤの御手をはなさじ
此のたびは必至無上の山登り
必死のがして攝め取られよ
此の度は必至とばかりそればかり
親のお慈悲に御すがりして
病こそ親のなさけの金剛座
許さるまでは我は動かじ
此の度は必死とはかり打すがり
親のなさけに必至道かな
無量壽の同じミオヤの中の友
別れも出來ず死にも得られず
六八を願ひし事を三つ年に
かなへてたべよ大ミオヤ様（五十歳は十三回忌 立つべき時）
我願ひかなへん爲の親の慈悲

色さまゞの心碎きて
病こそ救はんとての知らせなり
痛まざりせば知らず病みゆく
痛みこそなかゝ彌陀のお慈悲なり
心靜に法を味ふ
すねる子にあなたなかせし我罪を
わびつゝすがる彌陀のおんじひ
我去りしあとの供養は和合して
家内仲よく念佛する聲
御聖忌十週年所感
十劫の昔の佛の御恩こそ
十年昔の法の師の恩
病中諸人の供養をうけて
幾度か生れかはりて報いなむ
世の諸人に受けし供養を
雜誌の改題を祝して
數多き名前の中になつかしは
只大ミオヤの一つなるかな
村島さんに
白妙の清よけき君のたまものに

乘しく心地遲とこそ思へ
肉の身は皆早や落ちて南無しける
　ミオヤのもとにかへるうれしさ
日くれなきミオヤの照らす日のもとに
　いつも生かされ我靈あるかな
もとよりもミオヤの家にをりぬれば
　ゆくもかへるも無き身なるかな
いざさらば幾世の契り誓ひつゝ
　一足先に華のうてなに

× × × ×

（光のうた）

靈に活き肉に働く喜びぞ
　之れ悅びの悅びにこそ
命せをばつとめ果せばこゝもまた
　往く先きとても極樂にこそ
使命とてさま〳〵あれど大ミオヤの
　み業に仕ふ事は一事
親は雛を雛はまた親を喚び呼ばれ
　たのしき仲にすゝむ念佛

廣大の御恩心の隅々に
　しみ込まぬゆへ愚痴不平云ふ
まん丸な心になしていたゝけば
　ヨロヅ圓滿愚痴不平なし
我儘の己が心のすみ〳〵も
　御恩に充ちてまん丸となる
煩惱に身をも心も捕らはるも
　よべば親樣取りかへし給ふ
ミホトケの大慈悲知らぬ人とても
　子を愛するは慈悲のお流
子を愛す慈悲の流を逆のぼれ
　大慈大悲の親を拜むぞ
大慈悲のミオヤの胸に入りぬれば
　平等一子たれも同胞
大般の涅槃を期する人々は
　十六年に暖かけていな
肉の身は早やおいにけり今はたゞ
　彌陀のみもとに歸るばかりよ
何事もあなたまかせの船の中
　使命のつとめはたす外なし

みなとなへみなもろともに進みなば
　みなのみくににみなとはなれじ
まだ明けぬ夜の間も親のふところに
　思へば安き我心かな
日悋なきミオヤの照らす日の本に
　いつも生き生き我はあるなり
うれしさは生き働きの外になし
　念佛に生きて職の尊さ
苦をいとひ樂を願ふて彌陀たのむ
　心にあらで親なればこそ
一所にと慕ふミオヤと共なれば
　地獄の里もうれしかりけり
窶されて怨むな立てよかけのぼれ
　獅子の兒なればやがて吼へ立て
子を憶ふ親の思ひが先きなれど
　子のまごゝろにひゝく還念（感應）
憶はぬを憶はせ玉ふ親心
　憶ふ心に響く還念（感應）
親憶ふ思も親の憶はする
　思ひと知りて親憶ふかな

無量壽の親に抱かれありながら
　死するとばかり思ふ愚さ
今庭の紅葉眺めて恥かしと
　まだ背々の顔ぞ赧む（赧らむは羞ならずに恥かしき顔）
子の爲に親は子よりもより多く
　思ひ染じのお手廻しかな
煩惱のなやみしげきも有り難や
　早くすくはん彌陀のおんじひ
己が身に煩惱毒のあればこそ
　おのれと己が苦しみぞすれ
煩惱の毒の惱みを癒やさんと
　すがれ〳〵の彌陀の喚び聲
そぶりにも言葉遣ひも心せよ
　煩惱毒の瓦斯に火がつく
煩惱の毒に惱める人をこそ
　大病人とこそは云ふらめ
煩惱の大病人をすくはんと
　彌陀は醫王とあらはれぞする
あさましく結び〳〵し數々を
　蠶に抱かん我にぞあるかな

數々の結びを解いて蹴をば
　　ほとけとぞ成す大ミオヤ様（唯一の親）
稱ふれば導く慈悲に抱かれて
　　自づと心ほどけてぞゆく
稱ふれば慈悲に靄化まる煩惱が
　　菩提こころの發ひとなる
稱ふれば佛來たりて我ほどけ
　　親子へだてぬ仲となるなり
慕はしき佛心となりたくば
　　慕ひ〳〵て申す外なし
ミホトケの慈悲にほどける心には
　　惱み不平の影は消へゆく
へだてある心狹まきに障りあれ
　　お慈悲にとけし心ゆたけさ
大慈悲の心にとけて感ずなり
　　永恒の春の風はそよ〳〵
とけぬれば敵も味方もなかりけり
　　一味同體春風の裡
極樂を見て來たように云ふとりも
　　先づとけ入れよ慈悲の心に

大慈悲の心にとけて入りたくば
　　至心念佛三昧に入れ
極樂の樂がほしくば先づ願へ
　　己が心を慈悲にかへてと
御佛のお慈悲の中に在りながら
　　心に受けぬ人のあはれさ
我心足らぬがゆへと氣づかずに
　　不足不平でくらすあはれさ
かけめある心を彌陀にたのみなば
　　かけめ見出されかどもとれなむ
世の中に私の子とてなかりけり
　　皆御佛のあづけいとし子
我身さへ我物にてはなきものを
　　彌陀の預け子我がまゝにすな
み佛の御じびの中にすみぬれば
　　よそがないから住み心地よし
導きのじひのみすがた見る見ぬは
　　導く親のはからひのまゝ
要あればすがたも見せて下さらん
　　くだされずとも導きたまふ（事の嬉しき）

すがた見せ導き給ふ人にだに（要あれば）
　また見へずして導き給ふ
要するに見んと欲すれば則
　現ずるまでに育てられたし
みめぐみの前にすなほに膝折りて
　み名の乳にて育つ悉地よ
假の世を假の世ぢやとてあだにすな
　眞に到る假の世なれば
さら〳〵ととけてうなづく親心
　とけてうれしき我心かな
救はんと誓ふ大悲の誠心は
　神聖正義と喚ぶや子の胸
恩寵にはぐくれてぞ進まなん
　神聖正義の照らす白道
本願のミオヤの意子に響き
　神聖正義を照らし喚ぶなり
誓願の聖意順ひ行かんには
　先づ聖名稱へ育まれ行け
誓願に身をも心も托してば
　みむねのまゝにみちびかれ行く

神聖の照しに胸の闇の中
　知るや正しく行かん一道
神聖の智目正義の行足も
　育つは聖名の功德恩寵
　　濟尋院へ手向（三首）
露と散り煙と消ゆる有爲の世を
　越へて安樂無爲のみ國へ
今君は永き眠もさめはてゝ
　こひしき里の親と在りなむ
永き夜の眠も覺めて古里に
　まことの母と君は在りなむ
　一行と萬行
蘖に活く一行は稱名萬行は
　光榮あらはし我みのるなり（萬行體現）
佛でも因緣まかせの濟度なり
　吾等まかせて聖意のまゝに
蘖をもて通ふ泥洹無爲の淨土
　そを現はすは此の身此の土よ
泥洹の道につゞける修行土で
　菩薩と成つて次は佛よ

法藏の御こゝろ受けて淨土をば
　　娑婆に現はす人は菩薩よ
大般の涅槃に入れば諸佛不二
　　宿願因緣によりて化用異にす
諸菩薩は無爲の都に入りてこそ（三身一如の卽位式）
　　うけて尊しき眞應身にこそ
眞應身は不二にますます諸佛なれ
　　化用は宿願と因緣による

六字歌

一、話しや止めにして歌はふぢやないか
　歌はよいもの氣がはれる……ハア
　　南無阿彌陀佛　々々々々々々
一、同じうたはば六字歌うたへ
　親のつくりしすきな歌……ハア
　　南無阿彌陀佛　々々々々々々
一、歌でとれます親子の隔て
　とれる心地が淨土のすまひ……ハア

　　南無阿彌陀佛　々々々々々々
一、聲が阿彌陀か阿彌陀が聲か
　もはや離れぬ親子の仲よ……ハア
　　南無阿彌陀佛　々々々々々々
一、行くぢやなかつた分つて來たよ
　彌陀のお月で淨土の里が……ハア
　　南無阿彌陀佛　々々々々々々
一、歌ふ此聲世界中に響く
　佛手を拍つ菩薩は踊る……ハア
　　南無阿彌陀佛　々々々々々々
一、おどる心で働きましよう
　親につれられ淨土のつとめ……ハア
　　南無阿彌陀佛　々々々々々々
一、一日一日にみのるよ育つ
　しぼる汗さえ淨土の果報……ハア
　　南無阿彌陀佛　々々々々々々

（昭和三、六、三改作、仙太郎）

六　字　歌

話しやめにして歌ふぢやないか
同じ歌ならあの歌歌ふ　六字歌なら親がすき

ハア南無阿彌陀佛〳〵

六字歌へばハニフの小屋に　月はわけくる彌陀もくる

ハア南無アミダ佛〳〵

行くぢやないぞよ來て下さるぞ　歌で此の座が極樂淨土

ハア南無アミダ佛〳〵

聲が阿彌陀か阿彌陀が聲か　わしの心は離りやせぬ

ハア南無アミダ佛〳〵

歌ふ此の聲世界中に響く　佛や手を打つ菩薩は躍る

わしの心もおどり出す　ハア南無アミダ佛〳〵

おじひの歌（作りかえ）

なさけに燃ゆる親心
大慈大悲のふところに
淨土のさとり得しめんと
ながき年月まちわびし
親子逢瀬の時來り
涙に光る喜びの
わが子を念ふ親の慈悲
もつれ〳〵てナムアミダ
子を救はんの親心

闇路に迷ふわが子をば
手づからみづから迎へとり
あけくれわが子を案じつゝ
大悲の強し甲斐ありて
通ふ心の一すぢに
南無阿彌陀佛の聲こそは
おじひにすがる子のおもひ
聲は佛か吾が聲か
やるせなみまの演ちどり

子を喚ぶ大悲のお人聲が
南無阿彌陀佛とわが聲に
やがて來見（マミ）えん慈悲の面
念々不捨の稱名に
名號（ミナ）を離れぬ賢故
端正無比のみ姿に

久遠の光さしそひて
あらはれ給ふ御名號
來迎法樂と聞くからは
今日か明日かと待ちつゝも
一聲毎に念ほるゝ
いつも離れぬ南無阿彌陀佛

起行日課

よくこそ信じて呉れたぞよ
藥といへど其實は
斷やさず行めや賴むぞよ
正覺成就の晴着せず
戸さしてそなたのそばに添ひ
我子可愛の一念に
乳房かゝへてはなれずに
見えぬが病氣の勢なるぞ
早く育つて彼のはなれ
父子喜ぶ日を待つぞ
行めよ忘れな此の乳を
見ては忘れる我苦勞
心から誤もる親の目は

錢金いらぬ此の藥
そなた育てる母の乳
私もそなたの育つまで
建てた離れの座敷さへ
夜具なしの介抱も
今も苦勞の此の姿
そなたのそばに居るものを
體ができれば眼も見ゆる
建てた座敷を明け廣げ
親の心が知れたなら
追々體の出來るのを
忘れぬものは我子の身
暫しよそ見もせぬわいな

折角人と生れ來て　おちないものまで暗の道
獨り死し行く子を見れば　親は死ぬよりせつないぞ
信(心)順(行)なそなた見るにつけ　親は嬉しう思うぞよ〳〵

さめたる子の歌

南無阿彌陀佛阿彌陀佛　信み苦しかりし此の藥
信めよ行めとて賴む親　せめたてられて(信行)呑んで見りや
妙ぢや不思議ぢや此藥　いつとはなしに身は樂に
心も安うなりました　思へばほんとにすまぬ事
そんな藥が何になる　私や死んでも呑まぬぞと
オヤの心も知らずして　一向呑む氣を發さずに
行めば行まるゝ口をもて　却つて親をも馬鹿議り
たまさか口をあてて見りや　にがい〳〵と打捨てつ
親のいふ言仰信して　其儘呑む氣にならなんだ
思へば〳〵もつたない　にがい藥と思ひしも
にがいは藥にあらずして　煩惱毒の熱の勢
呑んだ藥のお蔭にて　どうやら熱もとれて來て
オヤの肩背に助けられ　二足三足部屋の中
歩んで見るも嬉しいよ　でも亦時にや熱が出て

煩惱毒にくるしめど　共の度毎に此の藥
南無阿彌陀佛と呑んで見りや　自然と治るが妙不思議
毒の根切りをするまでは　斷やされないが此の藥
あはれ不孝の私故　オヤコ隔ての雲かけて
今此の眼は見えねども　一遍よりも尙多遍
常に藥を行む時は　自然この眼も明くそうな
そうと聞いては嬉し泣き　されども見へぬせつなさに
すまぬ不孝の罪を悔ひ　あやまりはてて泣く涙
オヤのお慈悲の眼藥か　盛りし眼洗はれて
添ひますオヤの姿さへ　おぼろに見ゆる心地して
藥ぞのひもあらたのし　何れ此の目の明く時が
晴れて嬉しき彼の座敷　庭のながめもよかろうが
一時も早く會ひたさは　之まで介抱くだされた
慈悲のミオヤの面影よ　されどあせればあせる程
却つて惡いが業病人　これからすべて身も心
介抱くださる親まかせ　こちや南無阿彌陀佛々々々々々々々

光明名號攝化十方

光明大師善導の　本地阿彌陀の聖旨なる

選擇本願念佛の　　法藏開きて化益布く
明照大師法然の　　御跡を基ひ名號の
聖德稱揚宣傳し　　ミコエのトモの數を增し
名德體現分々に　　無作の精進世を淨め
釋迦の敎に身を活し　　彌陀の慈光に靈活き
益々人格充たすべく　　廣く務めて深く生き
聖旨實現共々に　　淨土の任務と精進まなん
彌陀釋迦の智悲の日月の照す下
合はせてぞ見る明照の道（身靈共生）
來たれ我友聞け光
疑の暗闇に身は生きて
淨き業を奉行せん

初　春

待つ年の先づ明けましてお芽出たう
南無阿彌陀佛の寶入船
彌陀の子と生れ往はるは一念よ
聖名の光を聞き得たる時
一念に生れし上の念々は
恩寵を仰ぐ愛と靈なり
船の名を眞應身丸

極惡最下の我身ちやと　　落ちた所に船の中
思はず出づる南無阿彌陀佛　　抱いてかゝへて名と體と
離れはせぬと身は一つ　　やれ難有や今ははや
超世の願船我身なり　　一念めざめりや西方丸
めざめにや此身は地獄丸　　そこに氣つけば又氣づく
此の世そのまゝ法の海　　浮べる船は渡すため
生死卽是涅槃界　　親の眞に活かされて
出入の息が南無と出りや　　四大の肉身生きた船
眞應身丸とは名つくなり　　直行船は是れ別機
常機は攝取母の手に　　變化られつゝ道中の
御用つとめに港寄り　　荷揚げ荷を積み人のため
我身忘れてはたらひて　　用がすんだら如來如去
中にや途中で疑惑して　　聲の煙も立たずなり
南無の息さへたへ〳〵に　　四大の船の足とめて
日毎々々に寢食ひのさまは　　之ぞ邊地のわづらひで
佛智疑ふ人々が　　未だ眞に生きぬから
自ら招く所なり　　念々彌陀を念すれば
船足とまる事はなし　　（念はれて）念へば憶ふ還た憶ふ
憶ひ念ふて親と子の　　愛はいやまし血は新らしく
元氣ほつ〳〵進むは西よ　　現に在ます父が待つ

下中六品飛び越へて　　聖名よぶ人は上三品
耀く岸につきぬれば　　果滿覺王慈悲の面
見ると迎接攝取と同時にて　　落つる涙もとゞまらず
親の果報が我が果報　　世間となつて我阿彌陀
常恒度世のはたらきに　　親の慈恩を報じなん
南無阿彌陀佛　阿彌陀佛
夕には此身も、帶も、さらとけて
　　ころり極樂彌陀と一體

人間禮拜

人拜め心の奥に彌陀光る
　　聖名に生れば肉も眞應身（お釋迦よ）

極樂

御光に淨土も娑婆も隔てなし卽いて離れぬ彌陀故に
　　樂々と使命（おほせ）のつとめ果しては參る所が眞實報土
ありがたや聖名に心の生かされて
　　此身も陀彌に生かされの身よ
生かされの身と知りぬれば今ははや
　　我有とては持つものもなし
我有と持つものさへもなき身をば
　　虛無の身とや名をば云ふらむ

虛無の身彌陀の御身と使はれて
　　至極無上の體と云ふらむ

無量壽

持つ力保つ命は佛なり　　無量壽佛ぞ宇宙持ちなり

無量壽

佛とは表獨尊內一切　　覺めたるもあり眠子もあり

大圓鏡智

懷中の鏡夜明けてながむれば　　六字の內に映らぬはなし

平等性智

宇宙は彌陀の御子の家やしき　　隔我なけりや一つ住居よ

妙觀察智

世界中彌陀の血を眝く緣重ね　　山鳥さへも父かとぞ思ふ

成所作智

阿彌陀佛の功德の體に南無と云ふ　　色香を添へて呼ばせてぞ賜ふ

我子の尊さ

人格尊重致しましよう　　我子卽ち如來の子
分擔作業は世の務　　如來へ仕ふ業なれば
たとへ我子であろふとも　　私の用事に使ふまい
若しも使へば笑しやくして　　冒瀆の上にも感謝せよ

彼も如來のいとし子よ
大事に大事に育てましよう
怒つて叱れば共地獄
叱る權利がどこにある
自分の足らぬを御佛に
ミオヤの聖意に契ふやう
力もないと氣がついて
兩手合せる心をば
我子も不愍と聞いてくれ
叱れば叱る程ふくれ
天より賦けし佛性
圓かに育つて圓樂の
立派に人の務めして
此世からなる極樂の
南無阿彌陀佛あみだ佛。

時の尊さ

時是金とはけちな事
命にまさる壽種
生へた壽は無量壽ぢや

我は預り親なれは
ほんに今日から叱るまい
落ちて苦しむせつなさよ
叱ろうよりも先づ詫びよ
そして願へや彼がため
私に育てる德はなし
ひたすら頼む御佛に
佛もあわれみ給へかし
嗚呼叱るまい叱るまい
横へ横へとふくれ行く
縱に直ほに伸びてくれ
家の樂しみ國の爲め
ミオヤに仕へ共々に
菩薩と互に拜みましよう

金より大事な壽命ぢやぞ
此種生へねば短い命
それにや先づ種播きなされ

命あつてのもの種ぢや
我實（人格）をつくる修行ぢやと
まいただけでは育ちはしない
南無阿彌陀佛あみだ佛と
彌陀報身の光明に
さてもうれしや有難や
此の土の御陰日の御陰
憂もつらひもこれからは
培ひくださる慈悲ぞと
願へず伸びましよつかのまも

此の土一生何事も
思ふて忍ぶが地に播くこと
靈の光のとほるやう
申せば生かす大日輪
芽生へ育ちて實を結ぶ
短い命で永遠の生命
追々人格成就する
我が信念に何も彼も
受けて喜び悦び生きて
南無阿彌陀佛あみだ佛

昭和六年十二月廿五日　印刷　　認代郵稅共
昭和六年十二月廿八日　發行　　年二回
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　小林七太郎　小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所　小石川區關口町六十五番地　電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番